

## 8-9 パナンペペナンペ「アッケテク ホプニ」解説

語り手：平賀さだも  
聞き手・解説：萱野茂

萱野：これはよくあの、Pananpe an Penanpe an [下の者がいました。上の者がいました] という uepeker [散文説話] で、自分ら子どもの頃でもよくお婆さんに聞かされたものなのですが、いわゆる、上の者と下の者と、がおったという笑い話めいたことになります。

平賀：本当によ。

萱野：「わたくしは下の者でありました。ある日のこと海辺へ出てみると大きな一頭の寄り鯨が寄り上がっておったと、これを何として持って帰ったらいいかなと、考えてよく見るとそこで1つのホタテ貝が寄り上がっておった。この辺がその童話にしてもその、ちょっとあの、話が何というかその、ちょっと普通では考えられない、いわゆる鯨をホタテ貝に積んだというんですから、まるきり話にならない話なんですけれども、そこがいわゆる童話というか笑い話なんです。

Pananpe が海辺へ行ってて大きい鯨が寄り上がった。その鯨をどっさり切ってきて脂や肉のどこを切ってそのホタテ貝にいっぱい積み込んだ。そしてホタテ貝の上に下の者も立って言うのには、『さあ私のうちへ帰ってください、お願いします。』と言うと、そのホタテ貝がふわりと浮き上がって、そしてゆっくりゆっくり飛んで、下の者の家の前へふわりと下りてくれた。そしてそこで沢山の肉や魚、いや、まあその鯨の肉を食べることが出来てなに不自由なく生活をしておった。

ある日のこと上の者がやって来て言うのには『共に貧乏であったお前は どうしてそんなに楽に生活しておるの？』って言ったら、『入って食べなさい、今あなたに話をして聞かせますよ。』と言うと、その上の者の言うのには『先に私はちゃんと知ってますわ！』と言いながら入口の柱にちよっところオシッコをかけて行ってしまった。

海辺へ行くとやっぱりその前と同じように大きな鯨と1つのホタテ貝が寄り上がっておった。

それにまだ〔また〕前の話と同じように、どっさりその鯨の肉を切ってホタテ貝にいっぱい積み込んで、そして上の者も共に乗り込んだ。そして『さあさあ早く早く、うちへ飛んで、うちへ飛んで、うちへ飛んで』と、言うとそのホタテ貝はグングングングングン高いところへ飛ん……飛んで飛び過ぎたもんだから少し高いところからドシーンと落ちて、えーそのホタテ貝も壊れ、そして **Penanpe** という上の者も死んでしまったとき。」という物語。

これは **Penanpe an Pananpe an**〔パナンペがいた、ペナンペがいた〕という **uepeker**〔散文説話〕ですね。